慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウィリヤム・Z・フォスター著 世界労働組合運動史概観
Sub Title	Outline history of the world trade union movement, 1956, by William Z. Foster
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.4 (1957. 4) ,p.331(101)- 335(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19570401-0101
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570401-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ピレンヌ著
高村象平他訳

『中世ヨーロッパ経済史』

原著は一九三三年に刊行された。当時ヨーロッパの学界では個別研究が大いに進み、これら諸成果を取入れた真に豊かな要約書の出現が待望されていた。中世と近世初頭の概説に対する要望は特に強かった。ピレンヌはこのようなときに、しかも彼の最後の著作の一つとしてこの書を書き下した。

そこにはピレンヌの長年の蓄積が見事に開花していた。今度これが立派な訳者たちを得て邦語に移され、我が国で数多く公刊されている西洋経済史の概説書に異彩を加えた。この訳書が刊行されるまでの経緯は「あとがき」に詳しい。また原著がピレンヌの諸著作のなかで占める位置については、付録の「アンリ・ピレンヌ―人と業績―」によって十分に尽くされている。ここでは、原著がヨーロッパ経済史の概説書として有する意味あるいは特異点といったものを浮彫りすることによって書評の責をふさぎたい。従って蛇足のそしりは免かれない。

翻訳書を書評しようという場合、本格的な態度としては、翻訳の仕方そのものに対する批判を主とすべきであった。そのような書評は別の人により試みられるのを待つのみである。もとより筆者のよくするところではない。むしろ筆者にはその資格すらない。ただつたない一文を綴って御恵与の御厚情に報いるのみである。

中世のような長くそして複雑な時期についてヨーロッパの経済・社会の歴史を概説することは困難な課題であった。しかしそれはピレンヌによってこの書において見事に果された。これを読む誰もが、諸変化の意味するものを徹底的に究明しようとする彼の態度、かくして得られた成果を巧みにまとめ上げた彼の偉大な綜合力に驚歎するに違いない。

この書を一読して、ピレンヌが商業関係に重点を置いていたことが知られる。彼は、もしカロリング時代に古代世界の経済的均衡が破れたとすれば、それは、東西の貿易関係がアラブの侵入によって妨碍されたからであったという事実を重視した。それから二世紀にわたり地方市場的経済が支配的で、経済生活のあらゆる側面は収縮した。十二世紀における商業の復活は彼にとり同じく重要な出来事であった。著者はこの商業の二つの重要な方向について述べている。一つはヴェネツィアをビザンツ帝国やイスラムと結ぶもの、他はスカンディナヴィア人をバルト海・北海・ロシアへいたらしめる動きであった。より後に地中海とアルプスの北部にイタリー貿易の発展が起った。フランドルの毛織物工業も国際貿易の大きな基礎となった。ピレンヌは、八世紀以来ほとんど完全に消滅していた都市生活の復活を示し、商人が新しいものを建設するに際して果した大きな役割を強調していた。

農村の諸階級と、十二世紀以降に起った農業上の諸変化に対して捧げられた部分は大いに参考になる。人口の増加・荒廃地の開墾・開発村の設定とその意義はよく示されている。ピレンヌは都市の農村に対する影響を他の論者以上に重視した。彼は貨幣経済の進展が地代を現物から金納に変化せしめたことを強調した。そしてこの転化こそが十三世紀を通じて農奴解放を促進したと考えた。

続いてピレンヌは貿易関係の重要性・大市・鋳貨・信用・財政について述べた。教会は微利の禁止を続けた。しかし実際の必要から教会法は侵害された。大規模な貿易の目的と方向を記述してピレンヌは、その資本主義的性格を強調した。

都市経済・工業規則・商人ギルドに関する部分は同様に興味深い。最後の章で著者は、十四・五世紀において起った諸変化が、中世を終結せしめた社会的混乱にいかに大きく影響したかを示した。この時期は又、著者によれば、国家の経済生活への介入という、次の世紀に本格的な展開を示した重商政策を紹介した時代でもあったのである。

概説書は絶えず書き改められなければならない。原史料による着実な研究の進展は新しい問題を提起し、そしてこれに新しい解答を与え、かくして概説のための必要をつくり出した。おびただしい概説書の刊行はこのような事情によった。特にそのなかでも、中世ヨーロッパの経済・社会に関するピレンヌのこの概説書は他に類がない。それは最初ゴルツの一般史のなかに、中世文化の一般的概説の一部として現われた。後に一九三六年には英訳されている。

知られるごとく、原著は、中世の経済発展に関する短篇であった。しかも傑作であり、最も輝かしいものの一つであった。その内容は中世ヨーロッパの一般史に興味を寄せるすべての人々に本質的なものであった。しかし最初それが教科書として書かれたのではないという事実は、最初から教科書として企図された普通一般の概説書と違い原著を、人間の事実に関心を寄せる一般の読者には、歴史の専門的な読物と感ぜしめるに違いない。

（渡辺国広）

ウィリヤム・Z・フォスター著

『世界労働組合運動史概観』

Outline History of the World Trade Union Movement, 1956, by William Z. Foster

一

ウィリヤム・Z・フォスターは、アメリカ共産党の指導者であり、労働組合運動に古い経歴をもっている。しかしながら、彼は政治的な実践活動や労働運動において、すぐれた指導者であるばかりでなく、多くの学問的な著作をしていることは、あまねく知られているところである。たとえば、「三つのインターナショナルの歴史」、「米国史における黒人」、「アメリカ共産党史」、「アメリカ政治史」、「世界資本主義のたそがれ」などで、いまここに紹介を試みる、「世界労働組合運動史概観」は、その主要なもののひとつであり、最近の労

作である。

フォスターは昨年七五歳をむかえたが、この書は、著者の長い実践活動の経験をもとにして、十八世紀後半から現代に至るまでの世界の労働組合運動の歴史を概観し、労働者階級の闘争がどのようにして起り、そしてどのように発展してきたか、そして将来いかにして闘われなければならないか、これらの点について、マルクス・レーニン主義者としての立場から、きわめて明解に論じている。序文にも記されているように、この書は世界各国の労働運動の研究者および実践家たちの協力と努力によって完成された尨大な研究で、いわば労働組合運動の辞典のような役割を果すものであろう。そしてとくに、マルクス主義者たちが、経済的政治的そしてイデオロギー的なあらゆる闘争において、根本的にはブルジョア階級から発するあらゆる混乱したイデオロギー的傾向、たとえばアナーキズム、ラッサール主義、ウェビヤン主義、メンシェヴィズム、ゴンパース主義、アナルコ・サンディカリズムなどを打破しなければならぬことを力説している。

彼は、一七六四年、すなわちジェニー紡績機の発明の年から一八六四年、第一インターナショナルの衰亡の年までの間を、競争的資本主義（Competitive capitalism）の時期、一八七六年から一九一八年、第一次世界大戦の終るまでの間を、成熟しつつある帝国主義（Maturing imperialism）の時期、一九一四年から一九三九年、第二次世界大戦の勃発までの四半世紀を、資本主義の一般的危機と

世界社会主義の誕生の時期、そして最後に第二次大戦中と大戦後から現在までの時期として、四つの時期に区分し、資本主義のそれぞれの段階において、労働組合運動はどのように発展してきたかを、くわしくのべている。

この書を全般的に紹介することは、筆者の目的とするものではないし、また必要なことではない。フォスターの主張するように、労働組合運動が、どのようにして国際的なひろがりをもつまでに発展していったかは、彼がこの書の五六章「労働組合運動発展の一般的法則について」（General law of Trade Union Progress）のなかで、きわめて明快にのべているので、これについて紹介したいと思う。

二

フォスターによれば、「歴史的に見て、労働組合運動の発展は、進化的な発展をとげている一方、その直接的な意味では、たえず進化的な前進をしていたわけではない。労働運動の発展を、もしグラフに描いてみれば、それはなめらかな傾斜ではなくて、一般的に上昇の傾向をたどりながらも、平原と山頂との連続であって、言ってみれば労働組合運動は、ゆっくりとした進化的な膨脹と急速な嵐のような発展との交代する時期をもちながら前進した。時として労働組合は、のろのろと発展したし、それどころか退歩さえした。このようなより急速な発展とよりゆるやかな発展の交代の連続こそ、労働組合運動の一般的な法則である」と（五〇二頁）。そしてさらにつづけてつぎのように言っている。

「労働組合のより急速なよりのろい発展の時期は、労働者階級の戦闘的精神の興隆と衰退に直接関係をもっている。一般に、労働者による戦闘的精神の定期的な爆発は、長い蓄積された、もしくは突然おとしいれられた不満の結果である。それらは、戦争、すさまじい賃金切り下げ、実質賃金の突然の低下、経済恐慌、そしてまたファシズムの恐怖などその他同じようなことによってひきおこされるのである。そして労働組合の闘いの高峰は、独占資本主義の発展によって激化させられてきた。競争的資本主義の時期においてすべての国の労働組合運動のもっとも初期の時代から、労働者階級の闘争の特徴的な高峰が存在したのであったが、その現象はとくに独占資本主義の段階に入るにつれて、ますます発展しはげしくなってきたのである」と。

このようにフォスターは、労働組合運動の発展の法則についてのべているが、この場合労働組合運動を飛躍的に発展させる労働者大衆の自発的な力が問題となる。「労働者が戦闘的な気分にみなぎり、政治的な条件が成熟すると、しばしば小さな事件が、広はんな闘争に火を点ずることがよくある。一九一七年のロシヤ革命も、一九一八年のドイツ革命も、深刻なそして基本的な階級的矛盾にその原因があるのだけれども、それらは、比較的小さな地方的な爆発に端を発しながら、燎原の火のようにひろがったのである」と。

このような大衆のきわめて自然的な爆発、しかもそれがやがて大規模な闘争に発展した例は、たくさん見出されるのであって、たとえば一九三七年一月の火花のようにおこったストライキである。この火花は、のちに一九三〇年代のC・I・Oをうち建てた一連のストライキと組織的なたたかいをひきおこしたのである。

以上のように大衆の強力な自然発生的な勢力は、労働運動をおしすすめる点で、大きな力をもっている。さきにのべたように、労働運動は、高い峰と谷との間に、いくつかの平原をもっているというように発展するのであるけれども、労働組合運動がこの峰の頂上にきたときは、すなわち労働者階級の戦闘的精神がもっとも強まったときであり、労働組合運動は飛躍的な前進をとげるわけである。しかしながらここでフォスターは、「たんなる戦闘的精神だけでは、労働組合の勝利をもたらし、勢力を増大させることはできない」と言う（五〇四頁）。労働者はよい指導者によって指導されなければならないし、もしそうでなければもっとも強力な自発的な運動も敗れてしまうであろう――そして右翼社会民主主義者によって指導された場合、その危険はとくに大きいというのである。フォスターはその例として一九一八年のドイツ革命、一九二〇年のイタリヤの金属労働者のストライキ、一九一八年から二三年にかけてのアメリカの大ストライキ、それから一九二六年のイギリスのゼネ・ストをあげているが（P. 504）、これらの場合は、労働者階級は闘うことを欲し、また闘う準備ができているにもかかわらず、社会民主主義者の

官僚化した指導者たちは、この労働者の戦闘的精神をおそれ、これを弱めるような行動をして、その結果折角もり上った労働運動を失敗に終らせたと指摘している。フォスターは、自分の長い間の闘争の体験から、労働組合は、保守的な右翼社会民主主義者の影響を排除すべきであると主張する。では各国の労働運動は、どのような発展をしたか。

※　※　※

イギリスでは、階級闘争のもっとも活潑な時期に、労働組合は飛躍的な前進をとげている。一八三〇年から四八年までの、オーエンの時代とチャーチスト運動の時期、つぎに一八八九年のロンドンの大ドック・ストライキであり、これはいままで排除された不熟練労働者の大衆を、職業別組合に加入させた事件であり、また一九〇八年から一四年の戦闘的な大衆のストライキは、のちに一九一四年から二〇年にわたる石炭、運輸、交通の三部門の同盟組合にまで発展させた。そして第一次大戦直後の世界的な労働運動の昂揚、最後に第二次大戦直後の組合運動の発展というように、その間に多くの沈滞や退歩がありながらも、労働者階級は、ブルジョア的な考え方からぬけ出ようとして、大きな進歩をとげた。

ドイツの場合は、大体三つの高い峰（ピーク）が見出される。一八九三年社会主義鎮圧法撤廃後の労働運動の急速な発展、第二に第一次大戦後の革命的な状勢のもとにおける熱狂的な昂まり、最後に第二次大戦後の急速な再建。

フランスでは、一九三五年から三七年にいたる人民戦線内閣のもとでの発展で、C・G・Tの組合員は一〇〇万から五〇〇万に増加し、フランスにおけるファシズム勢力の増大をおさえることができた。

またアメリカの労働組合の歴史は、イギリスと同じく、急速な発展と組織的・イデオロギー的な停滞の交代が特徴的な形であらわれている。すなわち、一八二七年から三三年にいたる激動の時期、南北戦争直後の闘争と組合建設の時期、一八七七年から九六年にいたる発展する帝国主義の時期のもとにおける闘争、一九一八年から二〇年にいたる第一次大戦後の組合の膨脹の時期、それから一九三三年から四八年にかけてのすさまじい発展、そしてこの最後の時期にC・I・Oは産業別組合を組織し、一九三三年の三百万から一九四八年の終りには一六〇〇万に、その組合員を増大させたのであった。

フォスターはさらにイタリヤ、日本、中国などについて、その分析をつづけているが、要するに、労働組合運動が発展するためにはその主体的な条件として、労働者階級の自発的な戦闘精神がたかまり、また客観状勢が労働者階級に有利に展開し、さらにその上に労働者階級の力をもっとも有効に結集させる指導的な理論こそ必要かくべからざるものであると主張している。

世界の労働運動の歴史をみるに、われわれはその背後によこたわっている三つの大きな流れを見出すことができる。すなわち右翼社会民主主義、アナルコ・サンディカリズムおよび共産主義であって、これらは、労働者階級の闘争の波のはげしく打ちよせる時にも、また労働運動が比較的静かな時期にも、それぞれ異なった態度をとったのであった。

右翼社会民主主義者は、階級闘争の最小限に自分自身をおいて、日日の小さな仕事だけを問題にしている。彼らは改革の擁護者であって、革命の敵である。言いかえれば彼等の主張する社会主義は、プチ・ブル的な改革にすぎない。

他方無政府主義者（アナーキスト）は、労働運動において、右翼社会民主主義者とは逆に、まったく極端に走っている。すなわちアナーキストたちは、日常の要求や闘争、そして組織などの、きわめてさしせまった仕事は無視し、大衆の自発的行動のみ過大評価することである。その結果は、労働者階級のもり上る力を浪費するばかりで、その組織を破滅させることになりやすい。では共産主義者はどうするか。

フォスターはつぎのように言う。

共産主義者はまず、労働者階級の自発的な力と、戦闘的精神の週期的な表現の重要性とを充分に評価するが、しかしまた彼等は、つぎのことをよく理解している。つまりこの労働者の戦闘性は巧みに訓練され、組織されそして指導されるのでなければ、現代の条件のもとでは失敗するにちがいないということである。そして最後につぎのようにつけ加える。この一節は実際に労働運動に従事している者はもちろん、労働運動の歴史を研究するわれわれも、大きな示唆をあたえられる。

「戦闘的な労働組合員は、労働組合運動の発展の一般的な法則についての生きた知識をもつ必要がある。これによって彼等は、階級闘争の二つの面において、もっと有効に働くことができるであろう。つまり労働者階級がわずかに進化的に発展するより静かな時にも、また革命的な飛躍をとげる戦闘的な動乱の際にも。活潑な闘争の時期をもてあそび、これを低く評価しようとする社会民主主義者の誤った傾向や、労働者の間の戦闘的精神をゆがめて評価するというアナルコ・サンディカリズムの傾向をさけながら、共産主義者および他の左翼主義者たちは、この両方の時期を理解し、極力これを利用しなければならぬ」と。

これは、フォスターが長い間の闘争から学びとった貴重な教訓でもあったろう。

なお、本書は最近、塩田庄兵衛氏等によって翻訳出版された（理論社、上、下二巻）。

（飯田　鼎）

書評及び紹介

堀　経夫著
『イギリス社会思想史概説』

水田　洋著
『社会思想小史』
『社会思想史の旅―イギリス―』

経済学の歴史が、宗教運動、農民運動、労働運動等を含む社会の